

ので、するをする事を覺えた、何時でも巡査を見ると直ぐに大急ぎで歩き出す、丁度使に出された途中の様に見せるんだ、又は百姓などの傍へ寄つて行く、自分の主人か、お父ちやんか何かの様に見せるんだ、すると巡査は僕の方を見るには見るが、手出しはせずに行つ了ふ、村なんかでは大變に都合が好い、交番も何もありやしないんだ、皆が野良に出て、跡に残つて居るのは、老人か子供ばかりだ、何んだと尋ねるから、乞食だといふ、何人に従いて居るんだと問く、獨りぼつちなんだといふ、何方から来たかと問く、町からといふ、それでお終局だ、食物や飲物を澤山呉れる、自分の思ふ様に歩き廻はる、走りたいと思へば、走る、匍はふと思へば、匍ふ、何所へ行つても、野があり、森があり、雲雀が囀つて居て、自分も飛ぶ事が出来れば好いと思ふ、腹さへ空なければ、歩いて歩いて、

世界の果迄歩いて見たいと思ふ、夫が丁度子供が母に連れて行れると同じ、誰かに背後から押れる様に思はれる、時々は大變に腹が空る事がある、腸が煮くり返つて、胃袋が熱付く様だ、此様な時には、土でも何でも嚙りたい様だ、頭はふらくして来る、だが食物にありつさへすると、夜も晝も喫ひながら歩きたくなる、それも好い、牢へ打込まれた事があつたが、それも悦しかつた、最初には恐い様だつたが、直に面白くなつた、巡査だつて初は自分を捕まへさへすれば、死ぬる迄打撲るだらうと思つて、大變に恐なく思つて居たが、窃つと背後から来て、首ツ玉を捕へた、其時己は商店の前で時計を見て居つた、黄金やなんかの種々な時計が澤山あつたのだ、巡査は己を掴む己は吃驚して喚くと、巡査は柔しく、お前は何人で、何處へ行くんだと問くんだ、己は何もかも云

つ了つたでなくつても直に知れると思つたから、巡査は何でも知つて居るんだもの、それから巡査は交番へ己を連れて行つた、其處にも立派な人が澤山居つて、何處へ行くか聞いたから、歩きた廻つて居るんだと云つたら、皆が笑つた結局半へ打込まれた、又た其所で笑はれた、でも後には此様な人達が種々な用を己に吩咐たり何かした、大方此人達は悪魔だつたらう。」

バシユカは此立派な人の事を特に恭しく話した、此人達は彼の心に強い印象を與へたらしい、然し其人々の形を、一々確には覚えてゐず、只一つの大きな膝とした形になつて居たのであらう。

一ヶ月ばかり靴屋と同居した後、バシユカは又た見えなくなつた、其後ペルフイシユカは、バシユカが印刷屋に栖込んで町に居る事を知つた、然し大變遠い所であつた、イリヤはこれを聞くと如何に

も羨まし相に溜息を吐きながら、バシユカに云つた。

「僕等は一生涯此處に居なければならんだらうか、」

人道の愉快に於て、有らゆる眩暈な
 る者に敵たらんが爲に、予は人間の
 相貌を有する各個が、眞に「人」たらん
 ことを望む

(ゴルキ)

明治四十二年七月十五日印刷
 明治四十二年七月二十日發行

定價金四拾錢

發行
 者兼

田岡佐代治

印刷
 者

石田道三郎

印刷
 所

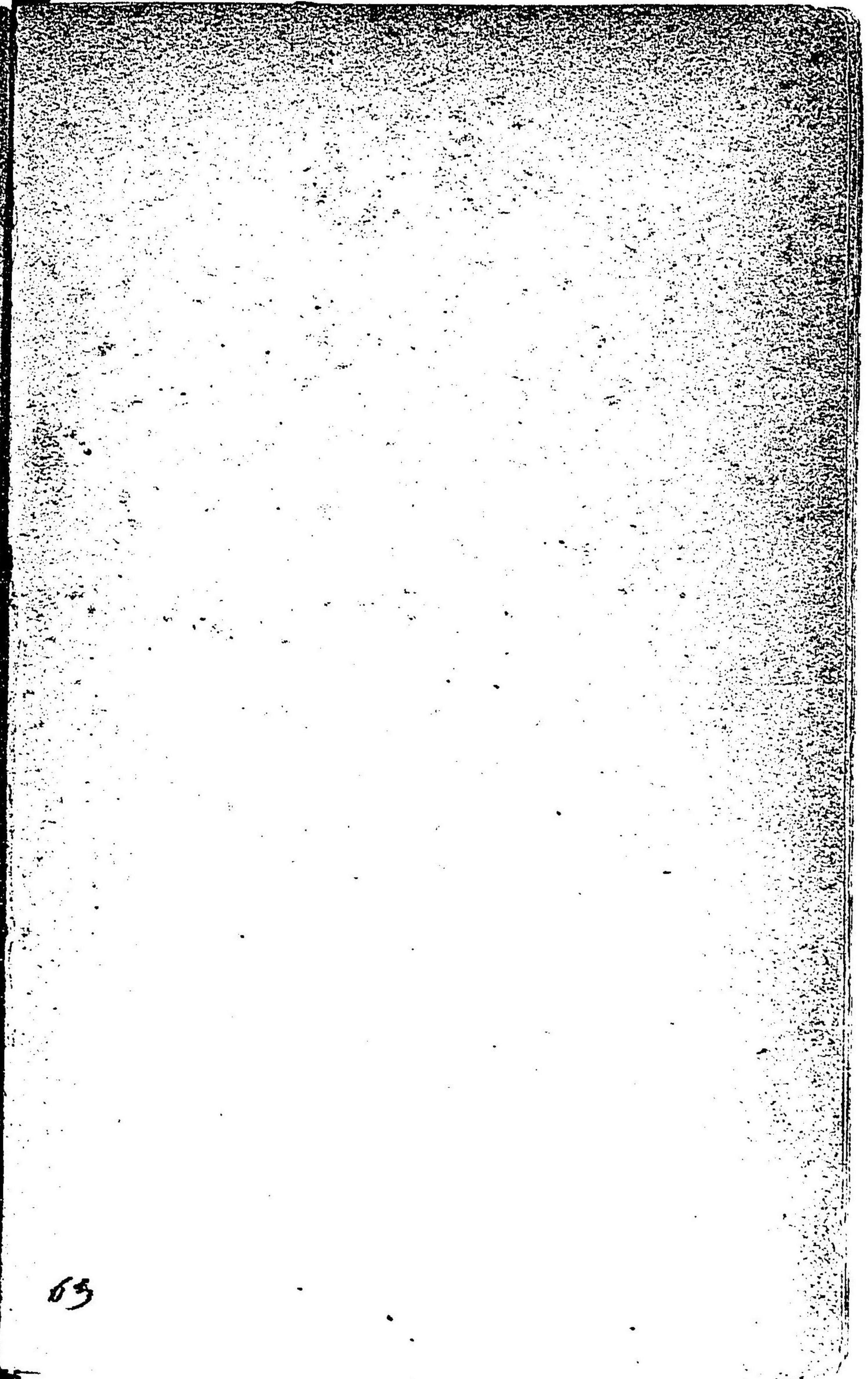
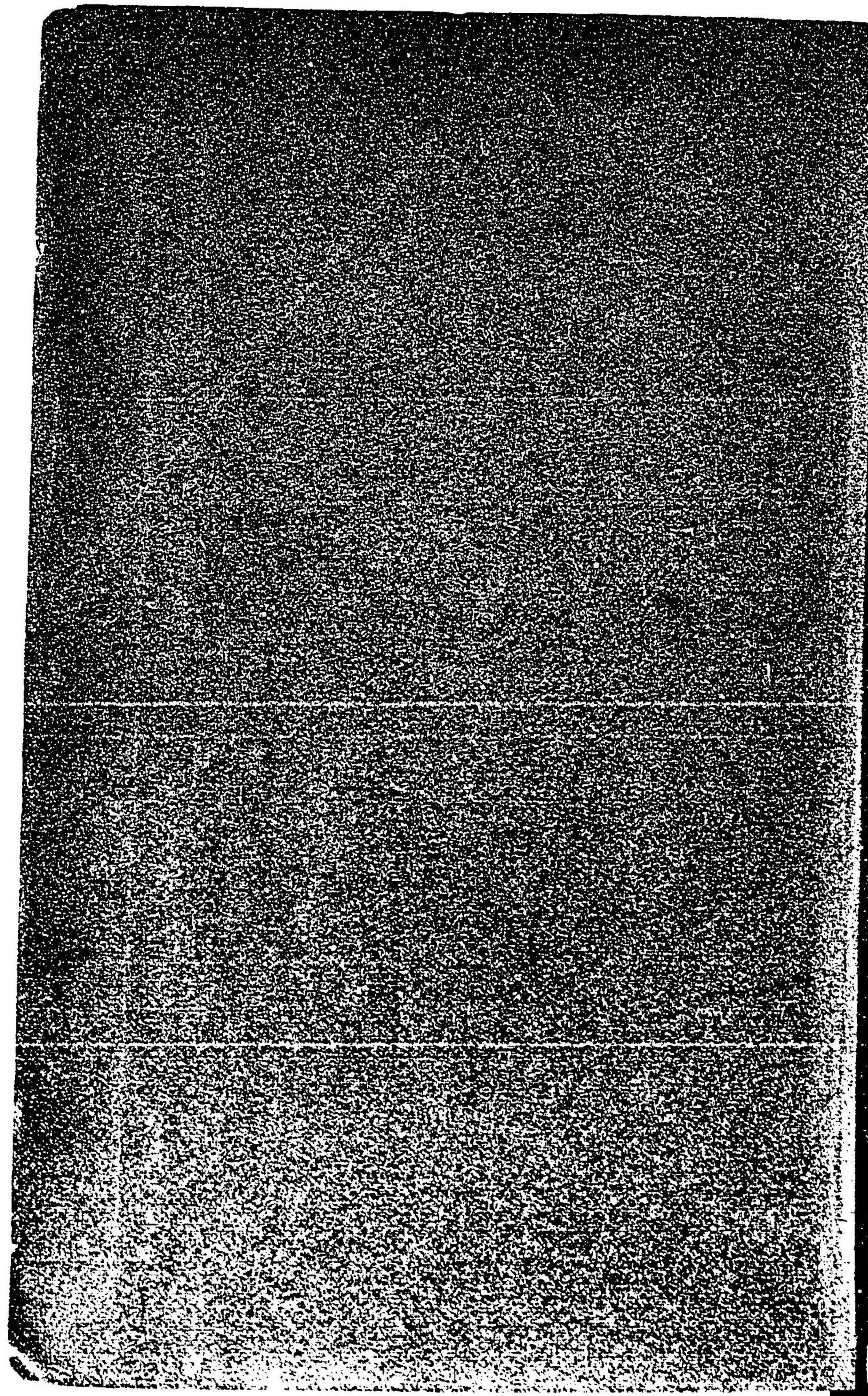
中央印刷所



發賣元

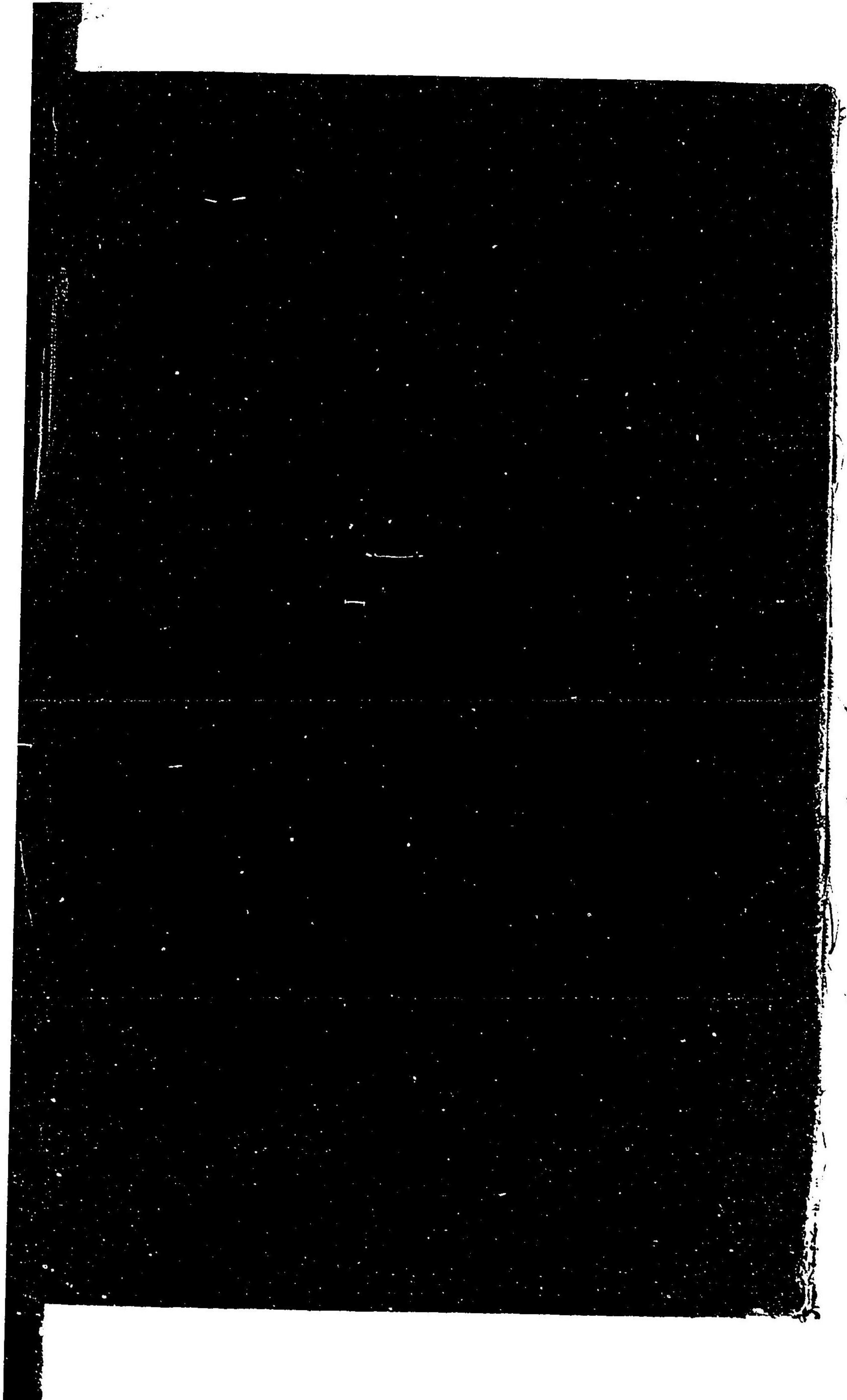
東京市京橋區中橋廣小路六
 振替口座東京第四一〇九番

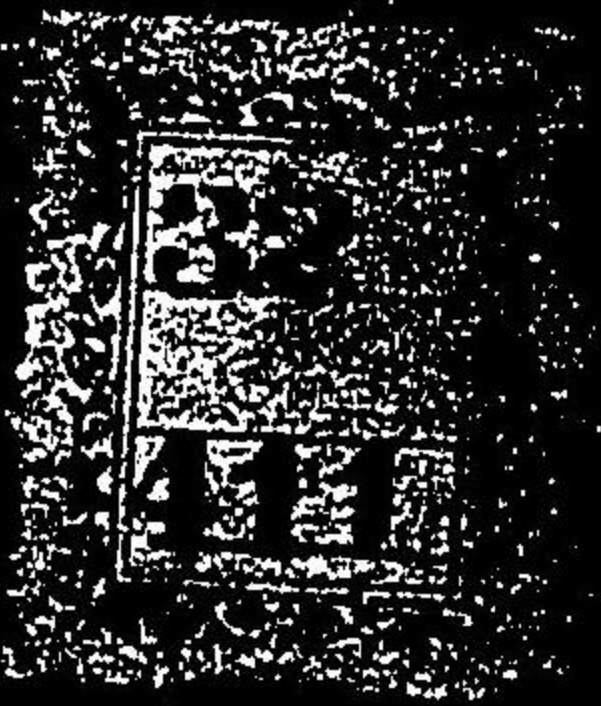
前川文榮閣



63

32
4





101028-000-4

32-411

三人

ゴルキー/著

M42

DBY-0310

